

# 眼科

## 加齢黄斑変性 早期発見を

加齢黄斑変性は、病名の通り、加齢が原因となる目の疾患だ。近年、高齢者の増加に伴い、患者数が増加していると考え、失明を招くこともある。最新の治療法や症状などを専門医に聞いた。(立花宏司)

J A尾道総合病院

小林賢・眼科部長 33



抗VEGF抗体療法について説明する小林部長(JA尾道総合病院で)

### 禁煙呼びかけ



広島編 57

目が見えるのは、水晶体や角膜などを通じた映像を、カメラのフィルムのような役割を果たしている網膜に映し、脳に伝えているからです。網膜の中央部に

あり、中枢の働きをするのが黄斑部で、ここに異常が発生するのが加齢黄斑変性です。

症状としては、障子や橋など真つすくの物がゆがんで見えたり、全体的にかすんだりします。視力が低下して、中心部が黒く抜けることもあります。問題なのは、片方の目だけで発症した場合、病状に気付くのが遅れ、知らない間に進行してしまうことです。時々、片方の目で順番に物を見て、異常の有無を確認してください。

加齢黄斑変性は、ゆっくり

りと進行する「萎縮型」と、急激に視力が低下する「滲出型」があります。滲出型は、黄斑部に異常な血管が発生し、出血することが原因で、最近、新たな薬を使うようになりました。異常な血管の成長を活性化させる「VEGF」という物質の働きを抑える薬を注射して、症状の進行を止めます。これが「抗VEGF抗体療法」です。病状によっては、特殊なレーザーを使うこともあります。

やはり早期発見が大切です。主因は加齢なので予防するのは難しいのですが、喫煙との関連が指摘されているので禁煙、そして、野菜中心の食生活をお薦めします。